フーゴー・ヴォルフと彼の支援者たち
―1877 年の書簡をもとに―

Hugo Wolf and his supporters :
From letters written by Hugo Wolf in 1877

高木　彩也子
TAKAGI Ayako

Hugo Wolf is considered one of the greatest composers of German romantic songs of the late 19th century. He was known as a tragic composer, suffering from depression, mood swings, and syphilitic insanity during his brief, troubled life. Despite this, the gifted Wolf attracted a number of benefactors who supported him throughout his life. In those days though it was not unusual for composers to enjoy such patronage, it was rare that Wolf could receive adequate financial support for over the course of his life.

The purpose of this paper is to survey the circumstances of Hugo Wolf's life in 1877—a year in which a series of occurrences brought a number of key benefactors into his life—through an examination of letters written by Wolf. These letters revealed two individuals whose support helped sustain Wolf: Felix Mottl and Adalbert von Goldschmidt, both of whom helped him by offering money and commissions, and helping Wolf cultivate important personal relationships. Encountering them in 1877 gradually led to Wolf's gaining an increasing number of supporters; from this point of view, the year 1877 was of great consequence to Wolf.

キーワード：フーゴー・ヴォルフ（Hugo Wolf,)、支援者（supporters)、1877 年、
書簡（letters)、フェーリクス・モットル（Felix Mottl)、
アーダルベルト・フォン・ゴルトシュミット（Adalbert von Goldschmidt）

１．はじめに

本稿は、ドイツロマン派歌曲の大家フーゴー・ヴォルフ Hugo Wolf（1860-1903）が生涯に受けた支援、その中でも 1877 年に焦点をあて、当時の支援状況、支援を促した根本的要因を解明することを目的としている。ヴォルフは「悲劇的な天才[1]」と称されるように、短く、波乱に満ちた生涯

を送った。生まれもった気難しく精神過敏な性格、さらにそれに加え、18 歳の頃にかかった梅毒が原因で 1897 年には躁鬱形態の進行性脳麻痺を発症し、精神病院に強制収容される。その後トラウン湖での自殺未遂などを起こし、狂気のまま 1903 年 2 月 22 日に満 43 歳を迎える直前に逝去している。作曲家としての人生も決して華々しいものではなく、歌曲作曲家として成功するものの、念願だったオペラ作曲家にはなれず、生涯貧困に苦しんだ。

このように、一見悲劇的に見えるヴォルフの生涯だが、意外にも彼には常に支援をしてくれる人々がいた。小さな友人グループが粘り強く彼を支援し、また 1897 年にはウィーンにフーゴー・ヴォルフ協会も設立された[2]のである。友人の中でも特に、後述する作曲家のアーダルベルト・フォン・ゴルトシュミット Adalbert von Goldschmidt（1848-1906）、フリードリヒ・エクシュタイン[3]Friedrich Eckstein（1861-1939）、ハインリッヒ・ヴェルナー[4]Heinrich Werner（1873-1927）、メラーニエ・ケッヒェルト[5]Melanie Köchert（1858-1906）らは、ヴォルフの生涯に大きな役割を果たしている。当時としてもこれほど手厚く、しかも長期間に渡り支援を受けた作曲家は珍しく、ヴォルフのこのような待遇は極めて稀な例である。彼の気難しく、反抗的な気性は一般的に考えれば敬遠の対象になるはずである。しかしなぜ人々は彼の創作に対する援助を惜しまなかったのか。彼らに支援を促した根本的要因はどこにあるのか。ヴォルフの創作の根本を探る重要な要因であるにもかかわらず、この点に関して掘り下げた研究はあまり行われていない。ヴォルフの評伝としては、ヴァルカー（1968）、ヴェルバ（1979）、デチャイ（1983）、ドルシェル（1998）が挙げられる。これらは、部分的に書簡を引用するなど史実をもとに詳細に書かれた評伝ではあるが、ヴォルフの生涯とそれに関する著者の見解を述べる側面が強く、彼の支援者に焦点を当てた記述はあまり見受けられない。また、最近のものではズッヒ（Suchy 2010）が、ヴォルフと彼の支援者という視点で論じている。彼の生涯にわたる経済状況を、支援者との関連性を交えて論じ、当時の中産階級の人々がヴォルフを支援していた文化的側面も踏まえて論じている点は評価できる。しかし、事実を客観的に述べるに留まっており、ヴォルフの創作と支援の関連、さらにそれらの支援を促した根本的要因を解明するには至っていない。

研究を進めていく中で、1877 年というある特別な年が浮上してきた。この年は、ヴォルフが首都ウィーンで活動を始め、ウィーンを生涯の「芸術の故郷[6]」とするきっかけとなった年であり、さらにこの年を起点として、ヴォルフの支援の輪が広がっていったという、彼にとって特に重要な年である。しかしその重要性とは相反して、この年を取り上げた文献は少なく[7]、この当時のヴォルフの支援状況は明らかとなっていない。そこで本稿では、1877 年におけるヴォルフを取り巻いていた支援状況、音楽的環境を、彼の動向を踏まえ調査し、明らかにする。調査するにあたり、研究対象資料としてヴォルフ生誕 150 年にあたる 2010 年と 2011 年にかけて出版されたヴォルフの全書簡集を参考にする。この全書簡集はレオポルト・シュピッツァー[8] Leopold Spitzer（1942 －）監修のもと国際フーゴー・ヴォルフ協会から、全 4 巻で出版された。ヴォルフの書き残した文書は全 2217 通にわたり、家族や友人、恋人宛てに書かれている。しかし、2217 通すべての書簡が出版されていた訳ではなく、これらの書簡は主に宛先の人物ごとに分類され、個別に出版されているのみであっ

た[9]。また書簡や書簡に関する資料が、ドイツやオーストリアを中心とした各国の図書館や個人所蔵など、広くはアメリカにまでも散らばっていたことが現状であった。そのため、ヴォルフの書簡資料は研究において扱いにくく、書簡の全体を網羅し、内容的研究まで至るということは極めて困難な問題であった。しかし、この全書簡 2217 通がヴォルフの全集の一環として出版されることにより、これらの問題はようやく解消されたのである。したがってこの全書簡集は今回の研究対象資料として十分正当性があるため、1877 年における書簡の支援関連・音楽的活動に関する記述を抜粋、考察することで当時のヴォルフの支援状況を検討したい。

2．1877 年の書簡について

1877 年にヴォルフの残した書簡は全 10 通あり、全書簡集の第一巻（Spitzer, Leopold. 2010. *Hugo Wolf Briefe : 1873-1891, Band* 1. Wien: Musikwissenschaftlicher Verlag Wien. 以下 HWB-1 と略す）に掲載されている。表 1 に宛先、記載年月日と記載地、書簡の所在地、書簡集における該当ページの一覧表を挙げるので、参照されたい。

表 1〈1877 年の書簡一覧表〉

宛先	年月日	地名	所在	該当ページ
ヴィンディシュグラーツ[10]の両親	1877 年 3 月 5 日（月）	ウィーン	Wn HS.	HWB-1 p18
ウィーンのフェーリクス・モットル	1877 年 10 月 8 日（月）	ヴィンディシュグラーツ	WSLb	HWB-1 p19
ヴィンディシュグラーツの両親	1877 年 11 月 13 日（火）	ウィーン	SBB	HWB-1 p20-21
ヴィンディシュグラーツの両親	1877 年 11 月 15 日（木）	ウィーン	SBB	HWB-1 p21-22
ヴィンディシュグラーツの父	1877 年 11 月 24 日（土）	ウィーン、夜	SBB	HWB-1 p23-24
ヴィンディシュグラーツの両親	1877 年 11 月 30 日（金）	ウィーン、午前 10 時半	SBB	HWB-1 p24-25
ヴィンディシュグラーツの両親	1877 年 12 月初め	ウィーン	Wn HS.	HWB-1 p26
ヴィンディシュグラーツの父	1877 年 12 月 18 日（火） 12 月 19 日（水）	ウィーン ウィーン、午前	SBB	HWB-1 p26-28
ヴィンディシュグラーツの両親	1877 年 12 月 22 日（土）	ウィーン	Wn Mus.Hs	HWB-1 p29-30
(地名不明) フランツ・ペーヒャルツ	1877 年 12 月 23 日（日） 12 月 29 日（土）	ウィーン	SBB	HWB-1 p30-31

※所在地略記

Wn HS. : Österreichische Nationalbibliothek,Handschriftensammlung（オーストリア国立図書館、自筆稿部門）

WSLb: Wiener Stadt und Landesbibliothek, Handschriftensammlung, seit 2006 Wienbibliothek im Rathaus（ウィーン市州立図書館、自筆稿部。2006 年以降、市役所内ウィーン図書館）

SBB : Staatsbibliothek zu Berlin（ベルリン国立図書館）

Wn Mus.Hs.: Österreichische Nationalbibliothek, Musiksammlung（オーストリア国立図書館、音楽部門）

一覧表から分かるように、1877 年に書かれたもののほとんどが、故郷の両親に宛てて書かれたものである。友人宛てのものはわずか 2 通、指揮者のフェーリクス・モットル Felix Mottl（1856-1911）とフランツ・ペーヒャルツ[11]Franz Peharz（生没年不明）に宛てたものである。フェーリクス・モッ

トルはヴォルフのウィーンにおける支援者として重要な人物であり、後に詳しく述べる。また書簡の書かれた時期に関しては、3 月に 1 度書かれた後、10 月まで一通も残っていない。これはヴォルフの動向とも関係しているため、以下、ヴォルフの動向と書簡とを照らし合わせながら、当時の状況を探っていく。なお書簡の内容は極めて多岐にわたるため、本論の目的である支援関連・音楽的活動についての記述がとりわけ見られない 12 月初め、12 月 23・29 日付の書簡は除き、全書簡 10 通中 8 通を研究対象とした。

3．1877 年　ヴォルフの動向

この章では 1877 年のヴォルフの動向と、その行動の動機と考えられるものを探っていく。この年、ヴォルフは 1875 年 7 月から通っていたウィーン音楽院から退学処分を受ける。音楽院退学の正確な月日を伝える文書などは残っていない。退学処分を受けた理由についてはいくつかの伝記[12]に記されており、その事件の経緯は次のようである。ヴォルフがある日、校長のヘルメスベルガー宛に〈フーゴー・ヴォルフ〉の署名入りの脅迫状を送りつけた。結局、脅迫状は仲間のいたずらであったが、筆跡鑑定をして欲しいというヴォルフの申し出は受け入れられず、退学させられた・・という説が有力なようである。ヴォルフ自身は学校当局が登校禁止の決定を下す前に、自分から退学した[13]、と生涯言い続けていたようではあるが、前述したとおりこの件に関してヴォルフが述べている書簡は残っておらず、事件の真相は定かではない。いずれにしても、この件をきっかけにヴォルフは故郷ヴィンディシュグラーツに戻ることとなる。彼が故郷に戻るつもりであったことは、3 月 5 日付両親宛て書簡[14]から窺える。

3 月 18 日に故郷ヴィンディシュグラーツに帰ったヴォルフは、その間、交響曲変ロ長調の作曲に着手した。オーストリア国立図書館の音楽部門に所蔵されているヴォルフのスケッチブックからは、1877 年 4 月 26 日に第 3 楽章としてニ長調の緩徐楽章を意図し、また別の草稿から 1877 年 5 月にスケルツォを脱稿し、さらにもう一度推敲されたことが分かる[15]。また、この帰省期間にピアノのための《フモレスケ Humoreske》、後にヴォルフの最初の歌曲集《女声のための 6 つの歌曲　Sechs Lieder für eine Frauenstimme》の中で出版される《朝露 Morgentau》などいくつかの歌曲が作曲された。しかし「長い隠遁生活の中、常にウィーンに帰る方法をたくらんでいた[16]」とあるように、やはりウィーンに戻ろうとする意志は強かったようで、ヴォルフは友人の一人フェーリクス・モットルに次のように打診している。

> ウィーンのフェーリクス・モットル宛　　10 月 8 日（月）　ヴィンディシュグラーツ
> 残念ながら、僕はまたあなたに無理なお願いを押し付けて、悩ませてしまいそうです。どうかこの願いを最初から大したことではないと、思わないでください。
> 僕の父はもともと酷い経営状況に苦しんでいたのですが、最近ではさらに 5000 フロリンの手形にも返済期限が来てしまい、もはや僕に十分な資金援助などできる状態ではなく、僕に、

ある程度まともな生活を送ることができるという幾つかのレッスンの見込みが立たないうちは、僕はとてもウィーンには戻れそうにありません。　あなたは既に大きな影響力と幅広い交友関係を持たれていて、この件で僕に親切にすることは、きっと造作もないことでしょう。なにしろヴィンディシュグラーツで冬を越すということは、僕にとって苦痛ですからね。ここではどんな音楽の楽しみも味わうことができないんです。どうか好意的に僕の頼みに応じて下さいますように。ウィーンに戻った時は、どんなお礼でも致しますので。それでは、僕の願いを聞き入れて下さるかどうか、あらかじめ早いうちにお返事を頂ければ、幸いです[17]。

父親の経済上の悩みを打ち明け、何とかウィーンに戻れるよう懇願し、苦心する様子がうかがえる。

モットルに加えさらにもう一人注目すべき人物がいる。1877 年の書簡に、繰り返しその名が登場している、アーダルベルト・フォン・ゴルトシュミットである。実は、先程の 3 月 5 日付両親宛て書簡[18]の続きにも、既にこの二人の名前が記されている。

ヴィンディシュグラーツの両親宛　　3 月 5 日（月）ウィーン　　・・・続き
僕は今も、少し収入を得るためにゴルトシュミットの伴奏の仕事を引き受けています。15 フロリンほどもらえれば良いのですが。　今日は《ヴァルキューレ》の初演があり、おそらくモットルと一緒にパルム公爵夫人の浅敷席に行きます。昨日はウィーン・フィルの演奏会に出掛けました。主要な演目は、メンデルスゾーンの《真夏の夜の夢》でしたが、それは素晴らしいものでした[19]。　　（下線は筆者による）

この書簡からも二人とヴォルフの親密さがうかがえる。一体二人はヴォルフとどのように関わりを持っていたのだろうか。次にこの二人とヴォルフとの関わり、さらに支援の状況について詳しく見ていくこととする。

4.　ヴォルフの支援者たちと支援状況

4－1.　ヴォルフの支援者たち

前章で述べた二人の主要な支援者フェーリクス・モットルとアーダルベルト・フォン・ゴルトシュミットとは、1876 年にヴォルフは知り合っている。ここでは二人の人物像、さらにヴォルフとの関連性について紐解いてみる。

（1）フェーリクス・モットル[20]（指揮者）

フェーリクス・モットルは 1856 年ウィーンのブルジョア階級の家に生まれ、ヴォルフとは 4 歳違いであった。1866 年に、レーヴェンブルグの神学校にボーイソプラノとして入り、1870 年からはウィーン音楽学校でアントン・ブルックナー Anton Bruckner（1824-1896）らに師事し、作曲

と指揮法を学び優秀な成績を修めている。彼のキャリアは、帝立・王立宮廷歌劇場 k.k. Hof-Opern-theater-Neues Haus（1920 年以降、現ウィーン国立歌劇場）のコレペティトゥアとして始まった。彼はその後、ウィーン・アカデミック・ヴァーグナー協会 Wiener Akademischer Richard Wagner-Verein(WAWV) の合唱監督を務め、1876 年の第一回バイロイト音楽祭では《ニーベルングの指環》の最初の全曲上演の準備において、指揮者ハンス・リヒター [21]Hans Richter（1843-1916）の助手を務めている。さらに 1886 年から 1906 年まではバイロイト音楽祭の指揮者を務め、当時ヴァーグナー作品の有能な指揮者として名前を馳せていたようである。この間に、カールスルーエ歌劇場の指揮者、後年はヴァーグナーの専門家としてニューヨークやロンドンで客演し、1911 年ミュンヘンにおいて 100 回目の《トリスタンとイゾルデ》を指揮している最中に心臓発作で倒れ、そのまま息を引き取った。このようにヴァーグナー作品に極めて定評のあったモットルから、ヴォルフの与えられた影響は大きく、ヴァグネリアンであったヴォルフの創作活動にモットルの存在はかかせないものであったと言える。当時既にキャリアを積みつつあった少し年上のモットルはヴォルフにとって、憧れにも似た存在であったに違いない。気難しく素直になれない性格のヴォルフがあれほど援助を懇願できたのも、モットルが相手であったからではないか。モットルはウィーンにおける、ヴォルフの頼れる兄的存在であったと考えられる。

（2）アーダルベルト・フォン・ゴルトシュミット[22]（作曲家）

二人目のアーダルベルト・フォン・ゴルトシュミットはウィーンの銀行員の家庭に生まれ、自身も銀行員となるが、のちに辞職して作曲と詩作に専念した人物である。彼が最初に成功を収めたのは 1876 年作曲のオラトリオ《七つの大罪 Die sieben Todsünden》のベルリンでの上演であり、この作品はドイツ諸都市、パリでも上演され成功を収めている。ただし、ハンスリックは、この作品を醜く、大げさで、ヴァーグナーを模倣しただけの独創性のないものであり、その作曲者は「何十万もの大罪を犯している」と非難した[23] ようである。その後、彼の最も主要な作品であるオペラ・オラトリオ三部作《ゲア Gaea》の作曲に取り組み 1893 年にベルリンで初演している。その他にも交響詩、歌曲、室内楽曲、ピアノ曲、コミック・オペラ《信心深いヘレネ　Die fromme Helene》等を作曲している。当初は純粋な創作意欲に燃え作曲に取り組んでいたが、私利私欲のために創作意欲は徐々に衰え、後年その存在はウィーン中に名の知られた奇人となっていたようである [24]。作曲活動とは別に、音楽貢献という面で、彼の妻パウラの主催するサロンで毎週日曜日に開かれていた音楽協会が挙げられる。このサロンはウィーン音楽界の中心的存在であり、1877 年、初めてこのサロンに招かれたヴォルフにとっても、この場所は、その後の支援の輪を広げる鍵となる場となった。ヴォルフより 12 歳年上のゴルトシュミットはこの頃既に作曲家として名の知られた存在になっており、経済的にも裕福なある一定の地位を持った人物であった。

ヴォルフが二人と知り合った 1876 年の書簡には二人の名前は見られず、当時の関係を探る事は困難であるが、志を共にするもの同士、惹かれ合い、多くのことを刺激し合ったと考えられる。様々

な音楽に溢れ、音楽の情熱を共有できる仲間のいる都ウィーンにヴォルフが戻りたいと懇願したのは、当然のことであろう。1877 年になるとこの年の全 10 通分の書簡において、12 月初め、12 月 23 日付以外の書簡にはすべて、両者またはどちらかの名前が記載されている。つまり、それほど二人とは親密な関係になっていたと考えられ、ある程度の援助を得られるという見通しがなければウィーンに戻ることはできなかったはずである。こうして 1877 年 11 月 11 日、ヴォルフは念願のウィーンに戻ることができ、ウィーンでの生活を再開することとなる。

４－２．　支援状況

前述の経緯でウィーンに戻ってきたヴォルフだが、実際には具体的にどのような支援を受けることができたのだろうか。ここからはヴォルフが受けた支援を、その種類に分けて書簡とともに見ていく。支援の種類はその内容から、大きく分けて（1）仕事に関する支援、（2）芸術的環境に関する支援、（3）音楽的支援の 3 つのものが挙げられる。最初に、これらすべての支援のきっかけとなったゴルトシュミット宅での音楽協会について述べる。

彼が「何人かのよい友をウィーン上流社会の音楽協会で見つけた[25]」という音楽協会は前述した通り、当時のウィーン音楽界において極めて有名なものであった。この協会に関しては以下の様な記述が残っている。

> ヴィンディシュグラーツの父宛　　11 月 15 日（木）　　ウィーン
> そのうえ当地ではある協会が開かれており、熱心に音楽や音楽文学、詩やドイツ文学などの講演が催され、意見交換が行われています。これは社会的な協会で、会員たちはゴルトシュミットの家に集まっています。その場に僕がいるのは当然のことで、なぜならみんな、とりわけゴルトシュミット、シェーンアイヒ[26]博士、バウムガルトナー[27]博士、画家ユリウス・ブラースなどが僕を非常に好ましく思ってくれているからです[28]。

書簡に記載されたこれらの人物はいずれも中産階級の著名な人物である。この音楽協会において、これらの人々と関わる中でヴォルフは自身に欠けていた社会的教養、知識などを身に付け、さらに交友関係を広げていくこととなる。1877 年に初めて参加して以降、ヴォルフはこの協会に支援し続けられることとなり、この協会への参加が、後の支援に繋がってゆく始まりであったことは間違いない。

（1）仕事に関する支援

ウィーンに戻ったヴォルフにとって最も必要であったのは、仕事に関しての支援である。生きていくために職を探していたヴォルフだが、新たにできた人脈が彼を助けることとなる。「会で知り合った人々が骨を折りピアノ教師の仕事を彼に紹介し[29]」、その中でも「特にゴルトシュミットやモット

ルが中心となって生徒を得る手助けをしていた[30]」ようである。その証拠として以下の記述がみられる。

> ヴィンディシュグラーツの両親宛　　11 月 13 日（火）　　ウィーン
> 昨日僕は一つ目のレッスンをしました。僕がレッスンしたのは二人の愛らしい小さな女の子でした。レッスンをしているのは火、木、土曜日の午前 8 ～ 10 時の間です。夜はゴルトシュミットに招待されて、そちらで有名な彫刻家ティルクナー[31]の兄弟に、二つ目のレッスンをしました。もっと詳しく言えば音楽の基礎を教えました。今日 (水) は 2 時から、最初のレッスンがあります。12 月の半ばに、もう一度レッスンがあるので、おそらく近いうちにまた報酬がもらえるでしょう[32]。

モットルが紹介していた件についての記載は、書簡からは得られなかったが、「ゴルトシュミットとモットルはピアノとヴァイオリンのレッスンで、多くの生徒たちと関連があった[33]」と指摘する研究者もおり、このように、ヴォルフは既に活動していたゴルトシュミットらの人脈に便乗し、仕事を分けてもらう形で収入を得ていたことが窺える。当時いくら得ていたのか具体的な収入額が書簡に記されている。

> ヴィンディシュグラーツの父宛　　11 月 15 日（木）　　ウィーン
> とりわけ喜ばしい知らせがあります、もうこれ以上送金をして頂く必要がなくなりました！二つ目のレッスンで毎月 15 フロリンもらえることになりました[34]。

この収入がどれくらいのものであったのか。フロリンの現在の邦貨への換算は物価水準などが異なるので困難であるが、参考までに、19 世紀前期のウィーンでは、政府の宮廷官房書記官が年収 500 フロリン、ブルク劇場の楽長が 560 フロリン、大学の若い講師が 400 フロリン、小学校教師は 120 ～ 250 フロリンであった[35]と言うから、一つのレッスンで毎月 15 フロリンもらえるのはほどほどに良い収入であったと考えられる。さらにゴルトシュミットはこの年にオラトリオ《七つの大罪》を初演しており、そのスコアの校正をヴォルフに依頼している。それが、前述した 11 月 15 日付書簡の、“ とりわけ喜ばしい知らせ ” の内容である。

> ･･･ゴルトシュミットが今日私に《七つの大罪》のスコアを校正するよう依頼してきたのです。僕は歌劇場に足を運んで、毎日数時間、レッスンがない日は午前中 9 ～ 12 時まで、午後は 4 ～ 6 時の間まで働いています。さしあたり、1 日につき 2 フロリンもらえるのです。作品全体の校正には 4 週間はかかるでしょう[36]。

まだ若干 17 歳のヴォルフに校正の仕事を頼むなど、ある程度の信頼がなければ決してしないこと

だろう。ヴォルフ自身も「彼は精神的・学問的観点からも、音楽の観点からも僕の中にとてつもない前進を認めています[37]」という自分が支援を得られる理由についての見解を述べている。そのうえゴルトシュミットは「お金に困ったら自分に相談すればよい[38]」という提案までしたと言う。つまりこれらのことから、ゴルトシュミットは若いヴォルフの才能を早くから見出し、将来性も見据えた上で支援していたと言えるだろう。以上のように 1877 年当時、ヴォルフは才能を見出してくれたゴルトシュミットらに仕事を紹介してもらい、ピアノのレッスンを幾つか掛け持ち、オラトリオスコアの校正・アシスタントをすることで、質素な生活を送るには十分な収入を得ていたという当時の状況が明らかとなった。

（2）芸術的環境に関する支援

次に、当時のヴォルフを取り巻く芸術的環境として、ウィーンでは日夜開かれていた演奏会が挙げられる。ヴォルフは当然のことながら金銭的余裕はなく、自分でお金を出し演奏会に行く余裕はなかったが、この演奏会に関しても二人から支援を受けることができた。まず初めに、二人から演奏会にかかる資金援助を受けていたことが書簡から明らかとなった。以下、その記載が見られる書簡である。

ヴィンディシュグラーツの両親宛　　11 月 13 日（火）　　ウィーン

・・・夜に僕はケルビーニの《水の運搬人》を観に行きます。モットルから入場券をもらったのです[39]。

ヴィンディシュグラーツの父宛　　11 月 15 日（木）　　ウィーン

今日の正午はモーツァルトの《レクイエム》があり、僕とモットル、ゴルトシュミット、シェーンアイヒはもうチケットを手に入れることができなかったので、ごまかして入り込まなければなりませんでした。最初に入ろうとした時はみんな追い返されましたが、二回目は成功でした。その大きな理由は、お金持ちのゴルトシュミットがいくらか紙幣を差し出したからです[40]。

次に資金援助の他、ゴルトシュミットの人脈のおかげで、数々の優遇を受けていたことも書簡から明らかとなった。以下のような記述が残っている。

ヴィンディシュグラーツの両親宛　　11 月 30 日（金）　　ウィーン

昨日の夜はヘルメスベルガー弦楽四重奏団の演奏を聴きに行きました。もっと詳しく言えば、僕はゴルトシュミットと一緒に、制服を着た二人の給仕と馬車に乗って出掛けたのです。幸運なことに、賑やかな“ウィーン音楽院生の男の子たち”の集団と出くわしました。彼らは僕に目を見張っていましたが、僕は彼らなど見るに値しないと思いました。（中略）アンナと

イーダのヴィンツェンベルク姉妹が、最上席から柄付き眼鏡でずっと僕の様子を観察していました。もう破裂しそうなくらい嬉しかったです。だって、かつてはあんなに貧乏だったヴォルフの野郎が、最前列の平土間席で声望ある作曲家や金持ちの貴族（準爵士である）ゴルトシュミットと並んで、じかに演奏者たちと、すなわち、とてもやさしく（下線はヴォルフ自身による）僕に語りかけてくれるヘルメスベルガーと実際に並んで腰をかけていたのですから[41]。

ヴィンディシュグラーツの父宛　　12月19日（水）　　ウィーン
ハノーファー宮廷劇場のショット氏が当地で３つの客演を行っています。一つ目の《タンホイザー》では圧倒的な大成功をおさめ、二つ目の演目が《トルバドゥール》、そして木曜日、すなわち明日《ローエングリン》があります。彼がとても傑出しているのは、卓越した演奏と作品の精神的解釈においてです。ショットはゴルトシュミットと仲の良い知り合いで、それゆえ、僕とも仲良くしてくれます。《ローエングリン》の入場券をショットは僕に８枚もくれました。

11月30日の書簡からは、ウィーン音楽院時代の同級生に対する自慢のような心情も読み取れる。またゴルトシュミットの幅広い交友関係にあやかり、ヴォルフも様々な著名人と知り合いになり、優遇されていた様である。前年までは貧乏な苦学生であったが、その待遇はゴルトシュミットとの出会いでこの年に大きく変化したといえるだろう。金銭面や、音楽界における人脈づくりなど、様々な面から芸術的環境を整えてもらうことで、ウィーンで音楽家として歩むための基盤が作られていったと考えられる。

（３）音楽的支援

最後に、（１）（２）で前述してきた以外の音楽的支援について取り上げる。この他にも、ヴォルフの才能を見込んだ二人はさらに才能を伸ばすべく、あらゆる面で音楽家としてヴォルフを育てようと尽力した。まずは「モットルは特にヴォルフの芸術的発展に貢献した[42]」、「ヴォルフはモットルから音楽的助言を受けており、とりわけ彼からピアノでヴァーグナー作品の解釈を学んだ[43]」と指摘されているように、モットルがピアノのレッスンを享受していたことに関する記述である。

ヴィンディシュグラーツの父宛　　11月15日（木）　　ウィーン
モットルからも多くを学ぶことができます。彼は週２回、僕にピアノのレッスンを受けさせていますが、ベートーヴェンやその他のソナタ、特にヴァーグナーのピアノ用スコア、彼の作品でもとりわけニーベルングの三部作を、必ず彼の前で演奏するという約束になっています。それによって僕はコレペティトゥアとして自信を持てるようになりました[44]。

このヴォルフの青年期、早い段階において、自身もコレペティトゥアとしてキャリアを始め、さ

らにヴァーグナー作品に定評のあるモットルから毎週レッスンを受けたことは、ヴォルフの作風や創作において、多大なる影響をもたらしたといえるだろう。また前述した通り、ゴルトシュミットは自作のオラトリオ《七つの大罪》のスコアの校正を依頼することで、この若い音楽家の才能を見込み、ヴォルフの才能を伸ばすことも視野に入れて依頼したのではないか、と推測できる。またゴルトシュミットの紹介によって、ヴォルフの音楽家としての道が開かれていったということを裏付ける記述が残っているため、抜粋して紹介する[45]。

> ヴィンディシュグラーツの両親宛　　11 月 30 日（金）　　ウィーン
> 再びよい知らせがあるのです！！ R. ヴァーグナーの親しい友人の一人シェーンアイヒ博士が、来年僕をバイロイトに連れていき、ヴァーグナーに紹介して、彼の未来の《パルジファル》劇の写しをするよう、僕を推薦してくれるというのです。そうなれば、僕は巨匠とじかに接触することができます[46]。

ヴォルフが初めてバイロイトを訪れたのは 1882 年の夏であり、この話は実現しなかった。しかしシェーンアイヒ博士は、前述のゴルトシュミットの音楽協会で出会った人物である。「生活必需品から職の支援に至るまでの彼ら（ウィーンにおける支援者たち）の支援がなければ、彼の人生は他の多くの方向を進むことになったと言っても過言ではない[47]」との指摘もあるように、ゴルトシュミットのもたらしたこうした縁がなければ、ヴォルフは音楽家としての道を歩めなかったであろう。1877 年の出会いが、確実に支援の輪を広げることに繋がり、ヴォルフが音楽家として歩めるための、大きな後押しとなったと考えられるのである。

5.　まとめ

本稿では、1877 年のヴォルフの書簡をもとに当時の支援状況を調査することで、今まで明らかとされてこなかった当時の具体的な支援状況、音楽的環境が明らかとなった。その中で、フェーリクス・モットル、アーダルベルト・フォン・ゴルトシュミットという二人の重要な支援者が浮上し、この二人を中心として支援の輪が広がっていったという支援体制が浮き彫りとなった。彼らは金銭的・物質的支援にとどまらず、職の提供、人脈づくりなど、あらゆる面での支援を惜しまなかった。彼らの支援があったからこそ、ヴォルフは 1 度諦めたウィーンでの生活を再び始めることができたのである。そして 1877 年のこの二人の支援を皮切りに、支援者は年々増え、1897 年のフーゴー・ヴォルフ協会設立、そして 1903 年に亡くなるまでの計 26 年間も、一時たりとも絶えることのない厚い支援の輪へとつながっていったのである。そうした意味で、ただの貧乏青年であったヴォルフの才能を見抜き、支援を始めたこの二人の功績は大きい。この二人との出会いが無ければ、今日の優れたヴォルフ作品は生まれなかった、と言っても過言ではないだろう。

今後は 1877 年以降、作曲家として大成していく過程においてのヴォルフと支援者たちの関係、支援を促した要因について、支援者側の証言や書簡ももとに、さらに調査を進める予定である。

主要参考文献

Aigner, Thomas, et al. 2010. *Hugo Wolf, Biographisches. Netzwerk. Rezeption.* hrsg. von Thomas Aigner, Julia Danielczyk, Sylvia Mattl-Wurm, Christian Mertens, Christiane Rainer, 188-215. Wien: Wienbibliothek im Rathaus.

Grasberger, Franz 1960. *Hugo Wolf.: Persönlichkeit und Werk*. Wien: Österreichische nationalbibliothek.

Jones, Gaynor G. 2001." Goldschmidt, Adalbert von" *The new Grove Dicitionary of music and musicians.* 9: 104. London: Macmillan.

Miller, Malcolm. 2001. "Mottl, Felix (Josef) " *The new Grove Dicitionary of music and musicians.*17: 231. London: Macmillan.

Saffle, Michael. 1987. " Adalbert von Goldschmidt: a Forgotten Listophile", *Journal of the American Liszt Society.* 21:31-41.New York:

Sams, Eric. 1980. " Wolf, Hugo(Filipp Jakob)," *The new Grove Dicitionary of music and musicians.* 20: 475-502. London: Macmillan.

Spitzer, Leopold, ed. 2010. Hugo Wolf Briefe : 1873-1891, Band 1. Wien: Musikwissenschaftlicher Verlag Wien.

———2010. *Hugo Wolf Briefe* : 1873-1891:*kommentar zu Band 1-3 und Register. Wien: Musikwissenschaftlicher Verlag Wien.*

Suchy, Irene. 2010. „ Das schofle Mäzenasspielen Hugo Wolfs Wiotschaftsbiographie." *in Hugo Wolf, Biographisches. Netzwerk. Rezeption. hrsg. von Thomas Aigner, Julia Danielczyk, Sylvia Mattl-Wurm, Christian Mertens, Christiane Rainer, 104-125. Wien: Wienbibliothek im Rathaus.*

Walker, Frank. 1968. *Hugo Wolf ; a Biography. Second, enlarged edition*. New York: Alfred. A.Knopf.

Walter, Legge. 1966. *Hugo Wolf by Ernest Newman.* New York: Dover Publications.

Werner, Heinrich. 1913. Hugo Wolf in Maierling; eine Idylle. Leipzig: Breitkopf.

ヴェルバ , エリック　1979 『フーゴー・ヴォルフ評伝―怒れるロマン主義者』 佐藤牧夫・朝妻令子訳　東京 : 音楽之友社。（Werba, Erik. 1971. Hugo Wolf oder zornige Romantiker. Wien: Verlag Fritz Molden.）

デチャイ，エルンスト 1983 『フーゴー・ヴォルフ――生涯と歌曲』 猿田直・小名木栄三郎訳　東京 : 音楽之友社。（Decsey, Ernst. 1921. *Hugo Wolf – das Leben und das Lied*. Berlin: Schuster & Loeffler. ）

ドルシェル , アンドレアス　1998 「〈大作曲家〉ヴォルフ」樋口大介訳　東京 : 音楽之友社。（Dorschel, Andreas. 1985. Hugo Wolf *mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*. Reinbek: Rowohlt Taschenbuch verlag.）

西原稔　2009 『新編　音楽家の社会史』 東京：音楽之友社。

註

[1] ドルシェル 1998: 1。

[2] 文化人類学者、著述家のミヒャエル・ハーバーラントが発起人となり設立され、1897 年 5 月 14 日に第一回総会が開かれた。1905 年 12 月に協会が解散するまで、病人となっていたヴォルフの生活費を寄付したり、作品を広めるために計 26 回の公演を主催するなど、8 年間に渡りヴォルフの支援を行った。

[3] 哲学者、起業家、学者、神秘主義者。ヴォルフの最初の歌曲集『女声のための 6 つの歌曲』、『シェッフェル、メーリケ、ゲーテ、ケルナーの詩による歌曲』を出版する際、自ら保証人となり資金援助も行った。

[4] 法律家、伝記作家。

[5] 宝石商の夫ハインリヒと共に、ヴォルフを援助する。1881 年以降、1903 年のヴォルフの死まで生涯支え続け、献身的に愛情を注いだ。ヴォルフの死から 3 年後の命日を迎えた後、投身自殺をしている。

[6] ヴェルバ　1979: 52。

[7] デチャイ 1983、ドルシェル 1998 においては 1877 年の記述はほとんどない。ヴェルバ 1979、Suchy 2010 においては、当時の支援者モットルやアーダルベルトについて記載はあるものの、当時の収入源など具体的な支援の詳細は不明である。

[8] ウィーン国立音楽大学の声楽名誉教授。国際フーゴー・ヴォルフ協会の会長であり、ヴォルフ全集の編集長も務める。

[9] 代表的なものとしては、恋人メラーニエ・ケッヒェルト Melanie Köchert に宛てた書簡集（Grasberger 1964）、友人のエーミール・カウフマン Emil Kauffmann（Hellmer 1903）、フーゴー・ファイスト Hugo Faißt（Draheim, Hoy 1996）に宛てたもの、一時期交際していた歌手フリーダ・ツェルニー Frieda Zerny（Hilmar, Obermaier 1978）宛てのものもある。

[10] Windischgrätz ヴォルフの故郷。当時はオーストリア・ハンガリー帝国のスロヴェニア人居住地域内にあるドイツ人の飛び領地であった。第一次世界大戦後帝国の瓦解ののち、シュタイアマルク州南部はユーゴスラヴィアに帰属し、現在はスロヴェニア、スロヴェニ・グラデツと呼ばれている。

[11] ヴィンディシュグラーツの音楽愛好者でヴォルフが開催する家庭音楽会に参加していた。後に地方裁判所判事になっている。

[12] ミュラー 1904、ヴァルカー 1968、ヴェルバ 1979、デチャイ 1983、ドルシェル 1998 等。

[13] ヴェルバ　1979：38。

[14] ヴォルフは次のように述べている。『今月の 15 日に部屋を引き払います。おかみさんが、20 日から部屋を空き部屋にしたいそうなのです。その後 20 日まではマイヤー・ヨハン（ヴォルフの親族）の家に泊めてもらいます』

[15] ヴェルバ 1979:49。ヴォルフはウィーンに戻る途中、グラーツ駅の待合室にこの草稿を置き忘れて紛失した。ウィーンで作品の復元を試みたものの、残りの楽章の断片を幾つか遺したのみで、作品は未完に終わっている。

[16] Walker 1968: 50。

[17] Spitzer ed. 2010: 19。10 月 8 日付書簡。

[18] 註 13 参照。

[19] Spitzer ed. 2010: 18。3 月 5 日付書簡。

[20] Miller 2001、Aigner 2010 を主に参照した。

[21] 19 世紀後半から 20 世紀初頭を代表する指揮者。当初はホルン奏者として活躍したが、後に指揮者に転向し成功を収めた。

[22] Aigner 2010、Jones 2001、Saffle1987 を主に参照した。

[23] Jones 2001 : 104. 37 ～ 40 行引用。

[24] ヴェルバ　1979：53。

[25] Walter 1966: 16。

[26] 法律家。R. ヴァーグナーの若い頃の友人であった、シュタントハルター博士の息子。ヴォルフは彼について次のように述べている。「シェーンアイヒは音楽のみならず、またもっぱら文学にも極めて造詣が深いうえ、決して間違いのない信頼できる判断を持った人物なので、僕に多大な影響を及ぼしています」（Spitzer ed. 2010: 27。12 月 18、19 日付書簡）。

[27] 法律家、ピアニスト、作曲家、音楽評論家。

[28] Spitzer ed. 2010: 21。11 月 15 日付書簡。

[29] Walker 1968: 54。

[30] Walter 1966: 19。

[31] ヨハン・シュトラウスの親友の一人でもあった。

[32] Spitzer ed. 2010: 20。11 月 13 日付書簡。

[33] Suchy 2010: 115。

[34] Spitzer ed. 2010: 21。11 月 15 日付書簡。

[35] 西原稔　2009：41。

[36] Spitzer ed. 2010: 21。11 月 15 日付書簡。

[37] Spitzer ed. 2010: 21。11 月 15 日付書簡。

[38] Spitzer ed. 2010: 21。11 月 15 日付書簡。

[39] Spitzer ed. 2010: 20。11 月 13 日付書簡。

[40] Spitzer ed. 2010: 21。11 月 15 日付書簡。

[41] Spitzer ed. 2010: 25。11 月 30 日付書簡。

[42] Spitzer ed. 2010: 13。

[43] Aigner . 2010: 205。

[44] Spitzer ed. 2010: 21。11 月 15 日付書簡。

[45] この他にもゴルトシュミットの《7 つの大罪》に関わっていたことで「僕はタッペルト（有名なヴァーグナー擁護者）に紹介されるという特典を受けました」（Spitzer ed. 2010: 29。12 月 22 日付書簡）という記述も残っている。

[46] Spitzer ed. 2010: 25。11 月 30 日付書簡。

[47] Grasberger 1960: 23。